07 アジアのヒトバベシア症発生国, 台湾, 日本のネズミバベシア分離株の比較検討

○斎藤あつ子・Dantrakool Anchalee・河合敦子（神戸大・医）・陳 瑩霖（高雄医学大）・矢野泰弘・高田伸弘（福井大・医）

Comparison between rodent *Babesia* isolates originated from Taiwan and Japan, human babesiosis emergence countries in Asia

Saito-Ito, A., Dantrakool, A., Kawai, A., Chen, E. R., Yano, Y., Takada, N.

ヒトバベシア症は、最近まで、アジアからの確実な報告はなかったが、1997年には台湾で、1999年には、日本で、初めてのヒトバベシア症例が確認された。いずれも、土着のネズミバベシアが病原原虫種であると推定、または結論されている。以来、私達は、我国のネズミバベシアの探索調査を開始し、各地でネズミバベシア (*Babesia microti*) 株を分離してきた。さらに、調査地をアジア諸国にも広げ、今回、新たに、アジアのもう1つのヒトバベシア発生国である台湾で *B. microti* 株を分離した。そこで、各地で得られた *B. microti* 株について、遺伝子型、抗原性などの比較検討を行った。我国では、従来の報告どおり、Kobe SSUrDN型の *B. microti* は淡路島の野ネズミにのみ認められ、その他の地域の野ネズミからは、Otsu SSUrDN型が確認された。異なるSSUrDNA型間の *B. microti* のITS1/2の塩基配列は、50~60%であったが、同じSSUrDNA型内では配列はほぼ一致した。一方、台湾の野ネズミから、Kobe SSUrDNA型の *B. microti* が確認されたが、この株は日本のKobe SSUrDN型の *B. microti* とITS1/2の配列が相当異なり、抗原性も異なることが示された。

08 わが国のマダニ相とライム病ボレリア分布の関係、特に東北と南西日本にみる問題

○高田伸弘（福井大・医）・石 畝 史（福井県衛環研）・藤田博己（大原研究所）・矢野泰弘（福井大・医）・本田俊郎（鹿児島県環境センター）

Tick-Lyme *Borrelia* relationship in Japan, especially epidemiological aspects found in northeastern and southwestern Japan

Takada, N., Ishiguro, F., Fujita, H., Yano, Y., Honda, T.

わが国で症例として現れるライム病は、北日本から中部地方山間で、シュルツェマダニ (Ip) の分布に合致して多いというのが定説である。ただ、「北日本に多い」と言われながら、東北地方については報告例が少ないことの説明を求めて、症例の多い甲信越と比較しつつ東北地方のIpと野鼠類につきボレリア (B) 保有状況を調べた。結果、東北ではIp密度は常には高くなく、強毒ボレリア種の濃度も意外に低く、加えて人口密集地が山間に偏らず、すなわち本病発生要因が少ないため実際の症例報告も少ないと理解された。一方、ライム病ボレリアが大陸から北日本へ拡散したというならば、南西日本で大陸に繋がる地区ではどうか、これも説明を求めて四国・九州～南西諸島で調査した。結果、北九州の九重山系で低濃度ながら強毒ボレリア種を見出したほか、旧北区南端の屋久島高山帯では本土共通のヤマトマダニと固有 *B. japonica* を証明、さらに東洋区の沖縄本島では東南アジア共通のミナミネズミマダニ媒介と思われる *B. valaisiana* を確認した。このように、ライム病ボレリアの分布も、大陸と関連したマダニ相あるいは東洋区と旧北区の地理区分により規定されていることが確認できた。ただし、地理的細部で種々の例外はあり得よう。